

日本の心を世界に伝える
Conveying the Spirit of Japan

第17回

文化庁文化交流使 フォーラム

文化庁文化交流使
活動報告会

The 17th Japan Cultural Envoy Forum

報告書

第17回

文化庁文化交流使 フォーラム

文化庁文化交流使活動報告会

The 17th Japan Cultural Envoy Forum

報告書

— 日本的心を世界に伝える —

Conveying the Spirit of Japan

目次

文化交流使事業概要	P.2
第17回文化庁文化交流使フォーラム議事録	P.5
活動報告	
プロフィール	P.14
笠松 泰洋	P.16
田中 功起	P.18
玉川 奈々福	P.20
米川 敏子	P.22
文化交流使一覧	P.25

文化交流使事業概要 Overview



平成 30 年度 FY2018



Photo by Shibata

① 笠松 泰洋 KASAMATSU Yasuhiro

作曲家

活動期間 2018年11月13日～12月14日, 12月31日～
2019年2月6日, 3月2日～3月24日

活動国 エクアドル, アルゼンチン, チリ, ベルギー, イギリス, オーストリア



Photo by
Motoyuki Daiфу

② 田中 功起 TANAKA Koki

アーティスト

活動期間 2018年7月1日～
2019年1月4日, 1月20日～25日, 1月30日～2月4日

活動国 アメリカ, スイス, ドイツ, キリシヤ, 中国, オランダ



文化庁では、芸術家、文化人等、文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を展開しています。文化交流使は、諸外国に一定期間（1か月～12か月間）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。

平成30年度までに、伝統音楽や舞台芸術、生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家、文化人等、延べ137人と、26組（団体）を86か国へ派遣しています。平成30年度は、下記の芸術家、文化人等を「文化交流使」に指名しました。

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan has sent artists and other cultural figures abroad to serve as “Japan Cultural Envoys,” with a view to deepening the international community’s understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields.

By the end of fiscal year 2018, a total of 137 individuals, and 26 groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to 86 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2018.



Photo by
Yoshinori Mido

③ 玉川 奈々福 TAMAGAWA Nanafuku

浪曲師・曲師

活動期間 2018年5月27日～7月10日

活動国 イタリア、スロベニア、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、
キルギス、ウズベキスタン



④ 米川 敏子 YONEKAWA Tosiko II

生田流箏曲・地歌 演奏家

活動期間 2019年2月21日～3月22日

活動国 カザフスタン、イギリス、ドイツ

第17回 文化庁文化交流使フォーラム 議事録



2019年12月2日 [月] 開場 14:30 開演 15:00

会場 東京大学 伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール (地下2階)

Monday, December 2, 2019 at 3:00 PM, Doors open at 2:30 PM

Ito Hall (B2 Floor), Ito International Research Center, The University of Tokyo

プログラム

モデレーター

サヘル・ローズ

タレント/女優

第1部

15:00 オープニングアクト (玉川 奈々福)

15:15 開会挨拶 (文化庁長官 宮田 亮平)

15:20 《活動報告》
玉川 奈々福
浪曲師・曲師

15:45 休憩

第2部

16:00 実演 (笠松 泰洋)

16:15 《活動報告》
笠松 泰洋
作曲家
米川 敏子
生田流箏曲・地歌 演奏家

17:05 小休憩

17:20 フォトセッション

17:25 トークセッション

17:50 エンディングアクト (米川 敏子)

18:05 終了

Program

Moderator

Sahel ROSA

Actoress

Part I

Opening Act by TAMAGAWA Nanafuku

Opening Remarks by MIYATA Ryohei, Commissioner for Cultural Affairs

Presentations by Japan Cultural Envoys

TAMAGAWA Nanafuku
Rokyoku Artist/Kyokushi (Shamisen player who accompanies a Rokyoku singer)

Part II

Performance by KASAMATSU Yasuhiro

Presentations by Japan Cultural Envoys

KASAMATSU Yasuhiro
Music Composer

YONEKAWA Tosiko II
Ikuta-ryū *sōkyoku* (music of *koto*, 13-stringed zither); *ziuta* (chamber music style *syamisen* music)

Photo Session

Panel Discussion

Ending Act by YONEKAWA Tosiko II

Closing

モデレータープロフィール

サヘル・ローズ タレント/女優

1985年、イラン生まれ。幼少時代を児童養護施設で過ごし、8歳で養母と来日。様々な苦難を乗り越えながら、高校時代から芸能活動を始める。日本語、ペルシャ語、ダリー語、タジキ語を話し、趣味・特技はテニスや絨毯織りと多彩。夢はイランに児童養護施設をつくること。現在、女優、タレントとして多くの番組等に出演し、幅広く活躍中。第9回若者力大賞を受賞。芸能活動以外にも、国際人権NGO団体の「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務めている。





玉川奈々福氏によるオープニングアクト

開会挨拶

宮田 亮平

文化庁長官

オープニングアクトとして、「日本の心を世界へ伝える」素晴らしい『浪曲シンデレラ』をご披露いただき、故郷の佐渡島で浪曲を聞いた遠い日の情景がよみがえりました。

日本文学研究の第一人者ドナルド・キーン氏は「いいものはつくりにくく、同時に鑑賞もしにくい。しかし、一度それを味わったら、最高の宝として一生楽しめる」と語っています。文化交流使の皆さんは、多くの国々のさまざまな場面で、互いの国の文化の素晴らしさを称え合われたことでしょう。これを足掛かりに、今後も積極的に海外で活動を展開し、さらに交流を深めていかれることを願っています。

これまでの皆さんのご努力と、外務省や国際交流基金をはじめとする関係者の皆さんのご尽力に改めて敬意を表します。また、今日お集まりいただいた皆さんも、本日のフォーラムを堪能していただき、日本の文化を世界へ発信していただきたいと思います。



宮田文化庁長官による開会挨拶



玉川奈々福氏による発表

活動報告

玉川 奈々福

浪曲師・曲師

私は、文化交流使に指名されるまで、海外にまったく縁がなかったため、どこへ行こうかと一から計画を立てていった。古典の浪曲には日本人の価値観が入っているが、この価値観が海外に通じるのかを知りたいと思い、海外へ持っていく演目を古典の『仙台の鬼夫婦』に決めた。事前に、特に字幕をしっかりと作成し、先にオチが見えたりしないよう字幕のオペレーターとも綿密に打ち合わせをした。

こうして7か国で上演したが、日本の価値観は問題なく受け入れてもらえることが、よく分かった。とくに女性の就業率が高いイタリア、スロベニア、ハンガリー、ポーランド、ウィーンといった中央ヨーロッパでは家庭における女性の地位が日本より高く、強い妻が夫を叩き直すシーンで拍手の嵐であった。

ヨーロッパのホールは、音の響き方が日本とは大きく異なる。1か月半の訪欧を終えて日本に帰ると「奈々福さん、声が変わった」と口々に言われたが、ホールの反響や残響によって体が変わるようである。多くのヨーロッパのホールでは、声を出すと、体が開いていくように感じた。

スロベニアでは、3つの小学校で「鯉のぼりプロジェクト」を実施した。世界には、魚を一度も見ただことのない子どもたちがいる。現地の子どもたちに鯉のぼりの絵を描いてもらって会場に飾りながら、子どもの成長を祝う日本の文化を紹介することができた。また4か所で、三味線等のワークショップや路上ライブを行った。

『仙台の鬼夫婦』を演じる際は、現地語を一部入れるようにした。観客は一瞬、「え？」と分からない様子であるが、二言目でドカンと笑いが来る。ちょっと現地語を混ぜるのは、とても効果的だと思った。

中央ヨーロッパの行く先々で、日本語を学んでいる多くの人たちに、何をきっかけにして日本に興味を持ったのかを尋ねてみると、日本のアニメや音楽という答えが圧倒的に多かった。文化の発信がこれほど国際交流に威力を発揮するのかと驚いたものである。

また、浪曲のストーリーは字幕で理解できても、風俗・衣装等を現地の人々に想像してもらえないか不安だったが、「私たちは黒澤映画を観ている。サムライのことなら大抵のことは分かるよ」とのことであった。先人の多大な文化発信の上に、今日の文化交流があるのだと思い知った次第である。

今回の旅では、浪曲を聞いてもらうことが1つの目標であったが、各国の語り芸にも出会いたかった。とくに日本は、落語、講談、浪曲、能、狂言等、観客が想像力を働かせて楽しむ語り芸の多い国である。キルギスには、世界最長の叙事詩といわれるマナスという神授型の芸能があり、その語り手はマナスチと呼ばれる。現地のオペラハウスでは、マナスチと共演することができた。ウズベキスタンにもバクシという浪曲に似た芸能があり、さまざまな弦楽器とともに共演することができた。

サヘル 本当に良い経験をされたようだ。

玉川 伝えるということもそうだが、自分自身が学ぶ、そして旅によって自分が変わる、ということも海外での活動を通して経験した。

サヘル 旅先で出会った方々との交流は続いているのか。

玉川 今でも続いている。ハンガリーからは再訪の声が掛かり、10月に行ってきたばかりである。さまざまな縁がつながり、ルクセンブルクでも公演をしてきた。語り芸には壁がないことが分かったため、世界中で語り芸のネットワークを繋いでいきたい。



サヘル氏によるインタビューに応じる玉川氏



笠松泰洋氏（左）と大平清氏（右）による演奏

笠松 泰洋

作曲家

日本語を話す日本人でありながら、西洋音楽を学んで作曲することには、常にギャップが存在する。また現在のオペラやミュージカルは、海外で作られたものが日本に持ち込まれ、翻訳上演あるいは現地語で字幕上演されるのが主流である。そのため常日頃、自分が作った作品を海外へ持っていけないものかと思っていた。

そこで、このたび文化交流使として活動するにあたり、私が2011年に作った日本語のオペラ『人魚姫』を3か月かけて英語版に作曲し直し、ウィーンで上演することにした。もう1つは、南米へ行き、現地の若手演奏家とディスカッションしながらリハーサルを行い、自分の曲を地域の人々に聞いてもらうコンサートを開いた。自分の曲をまったく違う環境で育った人々がどう捉え、どう演奏するのか。中央ヨーロッパ以外の地域の人々が、西洋音楽にどのように取り組んでいるのか。そういう興味があったし、この機会を逃せば、死ぬまで南米には行けないかもしれないと考えたのである。

南米では、2か月弱の間に4か国、5つの都市でコンサートを開いたが、同じことをロンドンでも行った。さらにロンドンでは、私が多く手掛けていた蜷川幸雄さん（演出家）の舞台音楽をどう作っていったか、それを通して蜷川幸雄がスタッフから見てどのような演出家であったかの講演会を行った。ロンドンのコンサートでは弦楽四重奏曲に加え、私が作曲した日本語の歌曲を日本語のまま英国人に

歌ってもらう演奏会を開いた。そして最後に、ウィーンへ行ってオペラを上演した。

自分の作った音楽を各国の人々に演奏してもらって、どんなふうに変化するのかと期待もしていたが、結果は真逆であった。それぞれの会場にいた日本人の観客も、こんなに日本的なものを現地の若者がまさに日本的に演奏していることに驚いていた。よほど時間をかけて日本の伝統文化を学び、私とも長い時間を過ごして練習した後、演奏を身に着けたものと思っていたようであるが、実際は2〜3日しか一緒に練習していない。ここは怖い場面、ここは不安な場面、ここは嬉しい場面だと説明すると、皆よく理解してくれ、どこの国でも自分が望んだ音楽になっていった。

私はこれまで、「音楽は世界の共通語」という言葉を「楽譜に書けば、どこの国の人でも演奏できる」という意味だと浅く理解していた。しかし音楽は、言語、国籍、年齢、性別より、もっと根源的な人間の本性に根差している。つまり人間という種族がもともと持っている基本的な感覚を音で表現している。そのため国境を越えて深く理解し、私が作った音楽の表現してほしい所をきっちり演奏してくれるのである。音楽を通じて、政治、思想、宗教を超えて人間同士として交流できることを実感した。

来年2月には、ウィーンで披露した英語版オペラ『人魚姫』をウクライナで上演することが決定している。今後、積極的に海外へ進出していきたい。

サヘル 南米の若い人たちと音楽を通して触れ合った感想は？

笠松 若いほど、素直で正直な反応ができると思う。ペルーの子どもたちとの練習は、本当に楽しかった。海外での経験を日本に伝える橋渡しができればいいと思う。



サヘル氏によるインタビューに応じる笠松氏



米川敏子氏による発表

米川 敏子

生田流箏曲・地歌 演奏家

はじめに訪れたカザフスタンのアルマティでは、日本語や日本文化を学んでいる若い人を対象にワークショップを行い、参加者全員に箏に触ってもらうことができた。その翌日、音楽院にてコンサートを行った。披露した箏組歌や三味線組歌は、日本でも演奏者が限られ、演奏会でもなかなか出されることのない演目である。終曲には、私が作曲した『風彩（かぜあや）』という箏とヴィオラの二重奏曲を紹介した。今回は、ヴィオラだけでなく他の西洋楽器とのコラボレーションを試みた。

3日目には、カザフスタンの首都アスタナ（現ヌルスルタン）へ移動。気温がマイナス30度になることもあるという。音楽院の大ホールでコンサートを開いたところ、500強の客席数に対し600名以上が集まってくださり、大変嬉しく思った。舞台稽古と本番の合間に、テレビ局が3つもインタビューに来てくださり、翌日に放映されたそうである。

カザフスタンには、ジェティゲンという民族楽器がある。日本の箏を小さくしたような形で、ひざの上に乗せて演奏する。現地の演奏家が『さくら』のアレンジ曲を弾いてくれた。コンサートの翌日には、音楽院の教室でワークショップを実施。私の演奏に合わせて、学生が民族楽器を弾き出すという楽しいひと時を過ごした。

日本の箏曲地歌は、1曲20～30分と長い。それを5分程度に短縮したほうがいいという意見も聞かれたが、私はあえてプログラムを変更せず、古典曲を選んだ。どのコンサートも、1曲目の第1音を弾くと、聴衆の耳が集中して静まり返る。その反応に触れ、自分の考えは間違っていなかったと感じた。

以前、ポーランドの高官から言われた言葉が印象に残っ

ている。「西洋人には分からないだろうという考えで、安易なアレンジ曲や新曲を持ってくる日本の音楽家や団体に会うと、私たちは馬鹿にされたような気持ちになります。しかし今回の演奏会では、日本で大切にされている古典と現代的な作品が演奏されたことで、日本音楽の伝統と創造を感じ取ることができた」とのことであった。日本の伝統音楽は、古典を重視しながら、常に創作を続けてきた。これを海外にも示す必要があると思う。

3月2日には、パリ経由でロンドンに到着。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）にて、コンサートとワークショップを行った。現地のイギリス人尺八奏者との二重奏、箏とヴィオラの合奏による『風彩』等、いずれも1回の練習とリハーサルで本番を迎えたが、互いの音楽性が一致していれば、どのような国の、どのような楽器ともコラボレーションできることを改めて感じた。今回の旅でも、素晴らしい演奏家との出会いに助けられたと思う。

最後に訪れたドイツでは、ミュンヘン五大陸博物館のホールでコンサートを開き、現地で活躍する日本人ヴァイオリン奏者との合奏を行った。ケルンには、ハンブルグからオーボエ奏者が駆けつけてくれ、コラボレーションすることができた。また、ラジオ局のインタビューを受け、コンサート前日に放送されたようである。

サヘル 海外の若い人たちとの演奏によって、得られたものは？

米川 初めての曲でも全力で演奏してくれるため、私も負けないよう一生懸命に演奏した。

サヘル 文化の交流でありながら、そこで得られるものは人のご縁もあると思う。生で見ることで人から感じられる日本の繊細さを、これからも日本の良さとして紡いでいていただきたい。



サヘル氏によるインタビューに応じる米川氏



トークセッションの様子

トークセッション

サヘル 皆さんからの報告を聞いた感想は？

宮田長官 国内でも楽器を運ぶのは大変なのに、海外ではなおさらだったと思う。また、語学力が1つの壁となって、日本人が自国の素晴らしさをなかなか伝えられないケースも多いが、そうした壁を完全に乗り越えた皆さんの話を聞いて、勇気もらった。心に響く音、さらに皆さんの姿が、人々の聴覚・視覚に一体となって伝わったのだと思う。

サヘル 文化交流使の活動で大変だったこと、苦労したことは？

玉川 海外には三味線屋さんがないため、万が一のために2丁持っていかなければならない。やはり荷物が多く、楽器の移動にはいろいろな困難があった。

サヘル 2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて、抱負をうかがいたい。

笠松 イベントだからということではなく、日常的なレベルで交流することが大切だと思っている。今は、SNS等で海外の人々とも連絡を取りやすいし、海外の情報も入りやすい。文化交流使として、行ったことのない国へ行けてよかったと思う。

サヘル こういう機会だからこそ、行ってみることで発見

できること、自信につながることもあったと思う。大変なことを経験したことで強みになったことは？

玉川 中央アジアのキルギスやウズベキスタンで、現地の芸能と交流することができた。それをきっかけとして、先月には、ルクセンブルクやハンガリーへ行くことができ、地球が以前より狭く感じられるようになった。以前は、浪曲を特殊な芸能だと思っていたが、海外でも問題なく通じることが分かり、自信になった。



交流使に語りかける宮田長官

サヘル 文化交流使の皆さんが集って何かを発信すれば、強みになると思う。新たな化学反応を起こせるのではないかな。

笠松 『浪曲シンデレラ』を観て、こんな伝え方があるのかと衝撃を受けた。玉川さんの実演は、私から見たら一人で演じていたオペラだった。素晴らしい。

サヘル 日本の心を世界に伝えるために、心がけていることは？

米川 常日頃やっているものを、素直にぶつけることである。それこそが聴衆の心を打つことを経験の中で感じていたため、貫いてよかったと思う。最初の第1音を弾いた時の会場の反応を見て、これは大丈夫だと確信できた時は、本当に嬉しかった。

宮田長官 かつてハンブルグへ在外研究に行っていた際、私が日本で当たり前に行っていた金工の仕事を見てドイツの研究者が驚き、「日本のことを教えてほしい」と言われた。文化交流使の皆さんも、劇的な違いを目の当たりにした経験が大きな自信につながると思う。荷物も重かったであろうが、日本の素晴らしい文化を背負って行かれたことを称賛したい。

サヘル 外国の方に合わせることなく、今まで培ってきた文化を素直にそのまま発信してほしいと思う。日本らしさを大事にしてほしい。

最後に、後に続く文化交流使の皆さんへアドバイスをいただきたい。

玉川 日本は、物語が豊かな国である。アジアに数多くある語り芸同士の世界的なネットワークを作り、交流するのが私の夢である。

笠松 現地でネットワークを持つ人と連携できている国では、活動が上手くいく。そのため、現地でのネットワークをしっかりと作ってから行くといいと思う。

米川 荷物をたくさん持てるように、筋肉を鍛え、心を鍛え、芸を鍛えながら、積極的に行って来てほしい。音楽は世界共通のため、何でもできると思う。



米川敏子氏（左）と亀川敏里氏（右）によるエンディングアクト

活動報告



Photo by Shibata

笠松 泰洋

作曲家

作曲を故三善晃、ピアノを故ゴールドベルク山根美代子、オーボエを故岩崎勇の各氏に師事。室内楽からミュージカル、オペラまで幅広く作曲して発表。また、故蜷川幸雄作品をはじめとする演劇、森山開次や平山素子のダンス作品、映画・テレビの映像作品等に数多くの音楽を提供している。2018年には劇団四季『恋におちたシェイクスピア』、2018福井しあわせ元気国体式典前演技の音楽を担当。また、オーボエとオーボエ系民族楽器（ズルナ、メイ）を演奏し、様々なレコーディングやライブに参加。クリスタルアーツ所属。

KASAMATSU Yasuhiro

Music Composer

He studied music composition under the late MIYOSHI Akira, piano under the late Miyoko Goldberg Yamane and oboe under the late IWASAKI Isamu. He composes and releases a variety of music from chamber music to musical and operatic tunes. Moreover, he provides music for theatrical plays such as those by the late NINAGAWA Yukio, dance works by MORIYAMA Kaiji and HIRAYAMA Motoko, video works for movies and TV shows and many others. In 2018, he was in charge of the music for “*Shakespeare in Love*” (Shiki Theatre Company) and for the performance preceding the ceremony of the 73rd National Sports Festival. He plays oboe and oboe-like ethnic musical instruments (zurna, mey) and participates in various recordings and live performances. He is affiliated with the Crystal Arts, Inc.

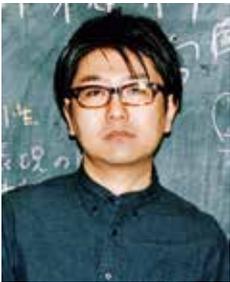


Photo by Motoyuki Daifu

田中 功起

アーティスト

主に参加した展覧会にミュンスター彫刻プロジェクト（2017）、ヴェネチア・ビエンナーレ（2017）、リヴァプール・ビエンナーレ（2016）など。2015年ドイツ銀行によるアーティスト・オブ・ザ・イヤー、2013年ヴェネチア・ビエンナーレでは参加した日本館が特別表彰を受ける。主な著作、作品集に『Precarious Practice』（Hatje Cantz, 2015年）、『必然的にばらばらなものが生まれてくる』（武蔵野美術大学出版局, 2014年）など。

TANAKA Koki

Artist

His works have been widely shown at art exhibitions including at the Migros Museum (Zurich), the Kunsthaus (Graz), the Kunsthaus (Zurich), the Hammer Museum (Los Angeles), VanAbbe Museum (Eindhoven), the ICA (London), the Mori Art Museum (Tokyo), the Skulptur Projekte Münster 2017, the 57th Venice Biennale 2017, the Liverpool Biennial 2016, the 55th Venice Biennale 2013, the Yokohama Triennial 2011, the Gwangju Biennial 2008, and the Taipei Biennial 2006 (Taipei). He received a special mention for national participation at the 55th Venice Biennale in 2013, and he received the Deutsche Bank artist of the year award in 2015.



Photo by Yoshinori Mido

玉川 奈々福

浪曲師・曲師

1994年日本浪曲協会主宰三味線教室に参加。1995年玉川福太郎に曲師として入門。師の勧めにより2001年より浪曲師としても活動。2004年『玉川福太郎の徹底天保水滸伝』全5回、2005年『玉川福太郎の浪曲英雄列伝』全5回プロデュース。2006年12月、芸名を美穂子から奈々福に改め名披露目。2012年一般社団法人日本浪曲協会理事に就任。様々な浪曲イベントをプロデュースする他、自作の新作浪曲も手掛け、他ジャンルの芸能・音楽との交流も多岐にわたって行う。2019年第11回伊丹十三賞受賞。

TAMAGAWA Nanafuku

Rokyoku Artist/Kyokushi (Shamisen player who accompanies a Rokyoku singer)

In 1994, she entered a *shamisen* class organized by the Japanese Naniwa-bushi Reciting Association, and in 1995, she became a disciple of TAMAGAWA Fukutaro. She has been an active *rokyoku* performer since 2001 with the encouragement of her master. She produced the “*Tettei Tenpo Suikoden* (complete Tenpo-era Water Margin (Shui Hu Zhuan)) by TAMAGAWA Fukutaro” five times in total in 2004 and the “*Rokyoku Eiyu Retsuden* (Rokyoku series of biographies of heroes) by TAMAGAWA Fukutaro” five times in total in 2005. In December 2006, she changed her stage name from Mihoko to Nanafuku and held an announcement ceremony of her new name. In 2012, she was appointed Director of the Japan Rokyoku Association. She has been producing various *rokyoku* events, creating new *rokyoku* pieces and engaging in exchanges with performing arts and music in other genres in a variety of ways. In 2019, she was awarded the 11th Juzo Itami Award.



米川 敏子

生田流箏曲・地歌 演奏家

幼少より、人間国宝・文化功労者である母・初代米川敏子から生田流箏曲、地歌の指導を受け、古典の基礎を身につける。その後、乗松明広に師事して作曲活動を開始した。また海外の公演にも積極的に参加、その芸域を広げた。近年は、リサイタルの開催、多数の海外公演、創邦21理事長として作曲にも力を入れ多方面で活躍中。日本芸術院賞、紫綬褒章、芸術選奨文部科学大臣賞、モービル音楽賞、文化庁芸術祭賞他受賞。研箏会五代目家元、くらしき作陽大学音楽学部音楽学科（邦楽）特任教授。公益社団法人日本三曲協会常任理事。

YONEKAWA Tosiko II

Ikuta-ryū *sōkyoku* (music of *koto*, 13-stringed zither); *ziuta* (chamber music style *shamisen* music)

Since early childhood, she has received guidance in Ikuta-school *sōkyoku* (vocal part and *koto*, a 13-stringed zither), *ziuta* (alias *jiuta*, chamber music style *shamisen* (*shamisen*) music for voice), *sangen* (three-stringed lute) and learned the basics of classical Japanese music from her mother, the first YONEKAWA Tosiko, who was a living national treasure and a Person of Cultural Merit. Later, she began to learn music composition and studied the basics under NORIMATSU Akihiro. She broadened her range of skills by participating productively in overseas performances. In recent years, she has held many recitals, including numerous overseas performances. She is working on composing new music as the head director of Soho 21. She has received numerous awards including the Japan Art Academy Award, the Medal with Purple Ribbon, the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology's Art Encouragement Prize, the Mobil Music Award, and the Agency for Cultural Affairs Arts Festival Awards. She has attracted attention for her activities outside the framework of *koto* music. She is the fifth-generation Head of the Kensokai, a specially-appointed professor at the Department of Music (Japanese Music), Faculty of Music, Kurashiki Sakuyo University, and Executive Director at Nihon Sankyoku Kyokai.



Photo by Shibata

笠松 泰洋

作曲家

活動期間 2018年11月13日～12月14日, 12月31日～2019年2月6日, 3月2日～3月24日
活動国 エクアドル, アルゼンチン, チリ, ペルー, イギリス, オーストリア

KASAMATSU Yasuhiro

Music Composer

Period of the activities: From November 13 to December 14, 2018,
December 31, 2018 to February 6, and March 2 to 24, 2019

Countries visited: Ecuador, Argentine, Chile, Peru, the United Kingdom and Austria

音楽とは何か, を感じる旅



ペルーでの若いカルテットメンバーとのリハーサル
Rehearsal in Peru with young quartet members

笠松は、文化庁文化交流使に指名され、非西洋の音楽文化を持つ日本以外の地域の音楽家が、自身の民族の伝統音楽と西洋音楽をいかに捉えているかを探りたい、という気持ちから、南米に行こうと思いました。最も地理的に日本から遠い音楽家が私の曲を演奏すると、今までにない演奏になるのではないか、という期待もありました。南米4か国とロンドンで、各国で活動する演奏家の方々とリハーサルをし、コンサートを開き、そこに集まって頂いた方々の感想をお聞きし、得た結果は全くの予想外でした。各地に在住の日本人の方々からは、例えば「チリの若い演奏家からまさに文楽や能の要素が感じられて驚いた」という類の感想を各国で頂きました。そこで思い浮かんだのは、「音楽は世界の共通語」という言い古された言葉でした。私はそれを、単に西洋音楽は世界に通じる、という表面的な西洋至上主義と受け取っていました。

各国でのリハーサルで私は曲の内容を説明しましたが、それは人の感情や状況であり、どの国でもよく理解され、理解され

るとまさに私の欲しい音が出ました。能や文楽の要素が入っていても、そこに生きる人間の感情や状況が表現されると、日本の音楽そのものが伝わった、と受け取られたのです。「音楽は世界の共通語」とは、「音楽は、人間に先天的に備わっているものに立脚する表現であり、それゆえ、後天的に取得される言語や文化には関わりなくホモ・サピエンスには受容される」ということだったのです。

一方、ウィーンでの英語によるオペラの制作と上演は、日本でオペラやミュージカルを作曲する者として、日本の舞台作品をどうしたら海外に持って行けるか、という課題に対する挑戦でした。日本語で作ったオペラを英語で作直したら、最初から英語で作った作品にはない音楽が生まれるのではないかと思ったのです。様々な人の協力を仰ぐことになりましたが、厳しいウィーンの観客がほぼ全員スタンディングで喝采してくれたのを見て、それは果たせたと思いました。この経験をどう生かして今後の活動を展開するかが、これからの課題だと思っています。



ペルーのコーラスの子供達と
With the children's chorus in Peru



ペルーでのシンフォニア・ポル・エル・ペルーとのリハーサル
Rehearsal in Peru with Sinfonia por el Peru

Trip to Experience What Music Is

Having been appointed Japan Cultural Envoy for the Agency for Cultural Affairs, I went to South America to explore how non-Japanese musicians perceive their own traditional folk music and Western music in non-Western musical cultures. I also had high hopes of hearing something new and original from musicians living geographically the furthest away from Japan performing my music. I rehearsed with musicians in four different South American countries and in London, held concerts, and listened to audience feedback, and the results were completely unexpected. For example, some of the Japanese living in these various countries said, “I was surprised as I was aware of elements of Japanese Bunraku (puppet theater) and Noh from the young Chilean musicians.” What came to mind was the proverb, “music is the common language of the world.” I had interpreted it superficially to mean that Western music can be understood anywhere, and that they were espousing a kind of Western supremacist doctrine.

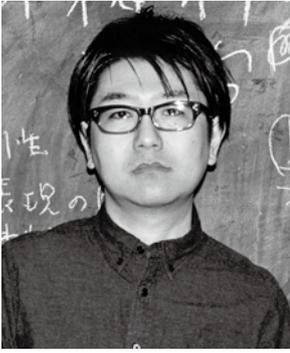
I described the content of the music during rehearsals in each country, and what I described were people’s feelings and situations which every country I visited understood very well, so the sound that I wanted came out. Even if elements of Noh or Bunraku could be found in the music, when the local musicians expressed their feelings about the situations, I interpreted this to mean that the Japanese music itself had been conveyed to them. What “music is the common language of the world” means is that music is a means of



ウィーンでのオペラ『人魚姫』公演カーテンコール
A curtain call after the performance of the opera “The Little Mermaid” in Vienna

expression that is predicated on innate human faculties, so it can be accepted by homo sapiens irrespective of acquired language or culture.

On the other hand, for someone like me who composes operas and musicals in Japan, producing and staging an opera in Vienna in English was a challenge as it involved translating a Japanese stage production for an overseas audience. If I rewrote a Japanese opera in English, music may be produced that would not be found in a work originally written in English. With the cooperation of a diverse range of people, I felt that I accomplished my goal after receiving a standing ovation from almost everyone in the demanding audience in Vienna. I hope to apply this experience in my future activities.



田中 功起

アーティスト

活動期間 2018年7月1日～2019年1月4日, 1月20日～25日, 1月30日～2月4日
活動国 アメリカ, スイス, ドイツ, ギリシャ, 中国, オランダ

TANAKA Koki

Artist

Period of the activities: From July 1, 2018 to January 4, January 20 to 25 and January 30 to February 4, 2019
Countries visited: The United States, Switzerland, Germany, Greece, China and the Netherlands

Photo by Motoyuki Daifu

日系移民史を調べること

今回ぼくが主な活動としたのは日系移民史を調べることでした。「文化交流使」として期待されているのは日本文化を海外に発信することだと思います。その意味では調査をベースにした活動は「文化交流」の名前とはそぐいません。でもぼくには日本の伝統に根ざした、紹介すべき特別な技能はありません。ハワイやロサンゼルスなどで協力者に会ったときに説明したのは、ぼくの活動は、ひとつの地域の特殊性を他の場所に紹介するのではなく、むしろ別々の文脈にあるもの、あるいは時間的な隔たりのある歴史と現在の中に共通点を見出すこと、いわばそうした時間と空間を繋ぐ「交流」を促すことだと。今回はその元になる情報を調査することに徹して、人に会い、資料を読み、場所を訪ねて歩きました。

日系移民史を調べることは、海外に渡航した人びとの困難の歴史を紐解くことです。それはグローバルゼーションの中で移動するさまざまな人びと、いま現在の移民や難民をめぐる問題との共通点に気づく旅でもありました。そこ



ロサンゼルス 全米日系人博物館で会場を案内しご自身の収容所体験を開かせていただいたビル・シシマさんと

At the Japanese American National Museum in Los Angeles. Bill Shishima gave me a tour of the museum and related his own internment story.

には当時ないがしろにされた人権、あるいはアジア系移民をめぐる差別や偏見がありました。

特に太平洋戦争中の日系人強制収容をめぐる問題は日本ではあまり知られていません。またハワイにおいては、強制収容はもうひとつ別の側面があります。アメリカ本土との関係による違いです。アメリカ本土では西海岸を中心としてすべての日本人／日系人が収容されましたが、そもそも日系移民の多いハワイでは、全員を強制収容することができず（社会の大半をしめる日系人を収容してしまっただけでなく、主として指導者たちだけに絞られました。だから、基本的に、収容所をめぐるナラティブではアメリカ本土にあった収容所群だけが中心に語られ、ハワイにあった、例えばホノウリウリ収容所などは除外されています。ただ、近年の発掘調査によってその状況は変わってきているようです。例えば収容所跡地見学ツアーが行われ、そこでは関係者の話を聞くこともでき、今後はより開かれた場所になっていくはずで



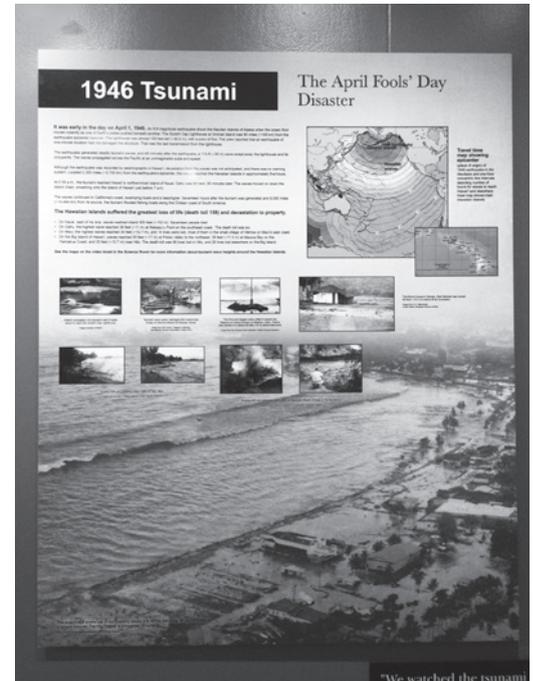
オアフ島 ホノウリウリ収容所跡地見学ツアーの様子
Tour of the former site of Honouliuli Internment Camp on Oahu island.

Researching the history of Japanese immigrants.

This time, my main effort was to investigate the history of Japanese immigrants in the US and South America. A Japan Cultural Envoy is expected to transmit Japanese culture abroad. In this sense, research-based project is not incongruous with cultural exchange. However, I do not have a special skill that is rooted in Japanese tradition. As I explained to interviewees in Hawaii and Los Angeles, my project does not involve introducing the peculiarities of one region to another region, but rather discovering the commonalities among things in two different contexts, or among temporally-disconnected things from the past and present, and promoting exchanges that link them through space and time. This time, I devoted myself to investigating source information by meeting with people, reading the available archival documents, and visiting places in person.

To research the history of Japanese immigrants is to read up on the struggles of those who journeyed overseas. These were also journeys of awareness by the diverse people who migrate in this age of globalization, who experienced common issues faced by current day immigrants and refugees. What I discovered was that Asian immigrants encountered human rights abuses, discrimination, and prejudice.

In particular, the internment of Japanese-Americans during the Pacific War is not well known in Japan. Internment was handled differently in Hawaii than on the mainland. On the American mainland, the government interned all Japanese/Japanese-Americans primarily on the west coast, but in Hawaii, the government was unable to



ハワイ島 ヒロにある津波博物館での1946年の津波の記録
Records of the 1946 tsunami stored at the Pacific Tsunami Museum at Hilo, Hawaii island.

intern everyone because the Japanese-American immigrant population was so large. That is, interning Japanese-Americans who accounted for the majority of the population would have destabilized society and bankrupted the economy, so the government focused on internment for mainly the Japanese-American leadership. Therefore, the narrative surrounding the internment of the Japanese during the war focuses mainly on internment groups on the American mainland; for example, the Honouliuli Internment Camp in Hawaii was excluded. However, this situation is changing due to excavation surveys conducted in recent years. For example, tours of the former internment site are offered; this allows participants to learn about the camp from guides, so the information will become better known and developed going forward.



ギリシャのレスボス島 難民たちが使っていたライフベストの廃棄場
Disposal site for life jackets used by refugees on Lesbos island, Greece.



ロッテルダム ロッテルダム映画祭プログラマーのジュリアン・ロスさんとのアフタートーク
After my film screening, a talk with International Film Festival Rotterdam programmer Julian Ross in Rotterdam.



玉川 奈々福

浪曲師・曲師

活動期間 2018年5月27日～7月10日

活動国 イタリア、スロベニア、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、キルギス、ウズベキスタン

TAMAGAWA Nanafuku

Rokyoku Artist/Kyokushi (Shamisen player who accompanies a Rokyoku singer)

Period of the activities: From May 27 to July 10, 2018

Countries visited: Italy, Slovenia, Austria, Hungary, Poland, Kyrgyz and Uzbekistan

Photo by Yoshinori Mido

実演，交流，身体の変化，そして世界の語り芸へ。

ヨーロッパから中央アジア，7か国をまわり，実演13公演，ワークショップを4回，その他学生さんとの交流会や，各国の語り芸のプロたちとの交流会などをいたしました。

実演は，字幕がしっかりできていれば問題はないだろうと思っていました。ただオペレーターとの打ち合わせが肝要。私のセリフの進行に合わせて，一行ずつ出してもらうこと。息が合わないと，先にオチがお客さんに見えてしまう。各国の担当者がそこをよく理解してくれ，オペレートも素晴らしかったです。

おかげで，江戸時代の夫婦の話がよく受けました。一部現地語も入れたので，爆笑と拍手をいただきました。楽しんでもらったのではないかと思います。

ただ，筋は理解してもらえても江戸時代の建物衣装風俗は……と心配したのですが，日本に興味のあるお客様が多く，黒沢映画をはじめとする日本映画をよく見ていらして，ヨーロッパでも中央アジアでも，「武士の時代」の風俗をよくご存知でした。多くの表現者の発信の上に，自分の今回の仕事があるのだということを思い知りました。

ヨーロッパは，ホールの響きが日本と全然違いました。その響きを体が感じて，おのずと芸が変わってくる，とい



タシケント公演。マイク使わなかったが，残響具合がとてもよいホールだった。Performance in Tashkent. Even though a microphone was not used, the hall had very good acoustics (there was little reverberation)

うことも体感しました。帰国後，声が変わったねとずいぶん言われました。わずか1か月半なのに，体は空間認識によってずいぶん影響受けるようです。

最も面白かったのは，中央アジアでの語り芸との交流。キルギスではマナスという，神授型語り芸との交流会と共演，ウズベキスタンでは，ドゥタールとの共演があり，またワークショップではバクシという語り芸と交流しました。

帰国後調べるとバクシは，「現在でも少数ながらウズベキスタンで活動している」「過去において芸能だけでなく，宗教的職能者としての役割をも担っていた」「仏教とともに中央アジアの各地域に伝播し，当地域におけるイスラムの影響が強まるにつれ，仏教とバクシとの繋がりが薄れていった」（ハルミルザエヴァ・サイダ「ウズベキスタンの語り手バクシ：過去と現状」『アジア文化研究』15号収録）。

バクシを語っている人は，現在40人から50人。浪曲と同じ絶滅危惧芸能です。共演した男性は，小さい頃からバクシを聞いて育ち，いまは民族音楽学校で学んでいる由。口琴や小さな竹笛もあやつり，見事な芸人でした。

この経験を生かして，他国の語り芸の探索，交流が今後できればと願っています。



キルギスのマナス財団にて，十一歳のマナスチの少年。七歳のときにマナスチになったという。

11 year old Manaschi from the Kyrgyz Manas Foundation. He became a Manaschi at 7 years of age

Live shows, cultural exchanges, physical changes, and addressing the world's narrative singing artists.

I toured seven countries from Europe to Central Asia; I performed 13 live shows, participated in four workshops, and held meet-and-greets with students and with professional narrative singing artists in each country.

I believed that there would be no problems with the live shows as long as the subtitles were handled well. Coordination with the subtitle operator was essential. I had the subtitle operator display each line as I delivered my lines. If we were not in sync, the audience would know the punch line before I had the chance to say it. The subtitle operators in each country I visited understood this well and handled the operation superbly.

Thanks to everyone's efforts, the story about the couple from the Edo Period went over well. I incorporated the local language for a portion of the story and received big laughs and applause. I felt the audience was enjoying it.

I was concerned that even if the audience understood the storyline, they would be unfamiliar with the architecture, customs, and clothing of Japan's Edo Period. But there were many audience members who were interested in Japan and had watched Japanese cinema, such as Kurosawa films, so that even in Europe and Central Asia, I found that people were familiar with the manners and customs of the samurai age. I realized that my work here was built upon the work of many artists who came before me.

In Europe, the hall acoustics where I performed were utterly different from how they are in Japan. I became aware of how my body picked up on these acoustics and changed how I performed. After returning to Japan, many people told me that my voice had changed. In just one and a half months, my body was greatly affected by the surrounding space.

What I found most interesting was the cultural exchange with narrative singing artists in Central Asia. In Kyrgyz, I had a meet-and-greet and performed with a Manas performer (divinely-granted narrative singing), and in Uzbekistan, I performed with a Dutar player and had a meet-and-greet at a workshop with a Bakhshi narrative singing artist.

After returning home and doing some research, I discovered that Bakhshi "are still active in Uzbekistan today



翻訳、通訳、字幕オペレートがいずれも素晴らしかった国際交流基金ブダペスト日本文化センターのスタッフの皆さんと。
Together with the staff of the Japan Foundation Budapest, which provided excellent translation, interpretation, and subtitling services.

although they are a minority;" that "in the past, they were not only entertainers, but served a religious function;" and that Bakhshi "spread together with Buddhism to various areas in Central Asia, but as the influence of Islam grew, the connection between Buddhism and Bakhshi grew weaker" (Khalimirzaeva, Saida. "Bakhshi," the Storyteller in Uzbekistan : Past and Present. Recorded in Volume 15 of *Asian cultural studies*").

There are presently between 40 and 50 people who perform Bakhshi. Like Rokyoku, it is an art form at risk of extinction. The man who performed with me had grown up listening to Bakhshi and said he is now studying at a folk music school. He can also play the mouth harp and a small bamboo flute. He was a magnificent performer.

I hope to make use of these experiences to explore and meet with narrative singers of other countries.



米川 敏子

生田流箏曲・地歌 演奏家

活動期間 2019年2月21日～3月22日

活動国 カザフスタン、イギリス、ドイツ

YONEKAWA Tosiko II

Ikuta-ryû sôkyoku (music of koto, 13-stringed zither); ziuta (chamber music style syamisen music)

Period of the activities: From February 21 to March 22, 2019

Countries visited: Kazakhstan, the United Kingdom and Germany

箏曲が現代に生きる伝統であることを海外に伝える

この度の文化交流使として活動を行ったヨーロッパにおいて、演目上で特に私が強調致しました事は、地歌・箏曲のジャンルが、江戸時代初期の作品だけを伝承しているのではなく、近世の江戸時代に変化した様式を含み、更に明治・大正・昭和・平成と変化し続けてきたものを含むことを明らかにすることでした。その為、最も初期の箏組歌・三味線組歌、江戸時代後期の作品、そして明治新曲を演奏し、更に私自身の箏と西洋楽器との作品を紹介致しました。

箏とヴァイオリン又はヴィオラ、オーボエなどの西洋楽器の作品を演奏したり、英国人の尺八奏者と合奏することにより、このジャンルが決して閉ざされたものではなく、広く世界の音楽に開かれていることを示して参りました。

又、私が西洋楽器の演奏家と演奏で対話することにより、地歌・箏曲演奏家が柔軟な音楽性を持つことを示すことができました。

私は、古典と創作と言うものは車の両輪であると常々考えております。古典無くして創作は存在せず、創作があってこそ古



アスタナ オルガンホールに約600人の聴衆を迎えるコンサート「秋風の曲」
Held concert "Song of the Autumn Wind" at Astana Organ Hall with an audience of about 600

典の真髄、力、素晴らしさを再発見できるのではないのでしょうか。古典を伝承して行く事と同時に新しい作品を創り、未来の古典を生み出す事も私たちの使命ではないかと考えます。

今回の文化交流使の活動の中で、海外においてこの事を実践でき、ご好評をいただきました事も、私に取りまして大きな励みとなりました。

又、今回の公演の事前の準備として、各国へコンサートの企画構成や意図、演目解説や歌詞の対訳等を、数ヶ月前からのやり取りにより先方にお渡ししたことが、現地の聴衆にご理解いただき易かったのではないかと思います。

邦楽器は音色が特徴と言われますが、今回は楽器を扱う専門家が同行できなかったため、箏に化繊弦(化学繊維の糸)を使わざるを得ず、絹弦、特に上皇后さまより御下賜の繭による絹糸の響きを海外にご紹介できなかったことが、まことに残念でございました。

ともあれ、各都市で聴衆の大歓迎を受け、鳴り止まぬ拍手を頂戴致しましたことは、あらゆる苦勞を払拭してくれました。

全ての皆様に心より感謝申し上げます。



アルマティにあるカザフスタン日本人材開発センターにてワークショップ
Workshop at Kazakhstan-Japan Center for Human Development

Conveying to a foreign audience how *koto* music is a tradition that lives on today



ミュンヘン五大陸博物館ホールにて総領事夫人、副総領事、ヴァイオリニスト鈴木舞さん他

With the wife of the Consul General, the Vice Consul General, and violinist SUZUKI Mai, among others at Museum Fünf Kontinente in Munich

In Europe, where I went this time as Japan Cultural Envoy, I particularly wanted my program to clarify how the genre of *ziuta* (chamber music style *syamisen* music) and *koto* music not only transmit works from the early Edo Period, but also include those that changed into the modern Edo Period format, as well as those that continued to change to Meiji, Taisho, Showa, and Heisei period formats. For this purpose, we performed the earliest *koto* and *syamisen* suites in addition to works from the late Edo Period and new songs of Meiji. I played the *koto* in accompaniment with western musical instruments.

I showed how *koto* music is not a closed off genre from the music of the world by playing the *koto* in accompaniment with other western instruments such as the violin, viola or oboe, or by performing a duet with an English *syakuhachi* (*shakuhachi*) player.

By performing with western instrument players, I also conveyed how *ziuta* performers and *koto* music players possess flexible musicality.

I often feel that classical Japanese music and composition are like the wheels of an automobile. Just as an automobile cannot operate without its wheels, composition cannot exist without the classics. By composing, we can rediscover the essence, power, and significance of the classics. Is it not our mission to transmit the classics to future generations,

compose new works, and even engender future classics?

As Japan Cultural Envoy, it was very encouraging for me to put all this knowledge and experience into practice and for it to be well received during my trip abroad.

In preparation for these public performances in various European countries, I spent a few months coordinating with the people in charge, explaining the concert plans and purpose, arranging the program, and providing translations of lyrics. As a result, local audiences were able to more easily understand and appreciate the music.

It is said that the unique characteristic of traditional Japanese instruments is the timbre. But because an instrument specialist was not available to accompany me this time, I was forced to use synthetic fibers for the *koto* strings, so I was unable to introduce the distinctive reverberation produced by silk strings (made from silk threads taken from cocoons bestowed by former empresses of Japan, no less) to the overseas audiences.

I received a warm welcome from audiences in each city, and great applause afterward, which swept all my troubles away.

I wish to extend my heartfelt gratitude to everyone involved.



ケルン 日本文化会館コンサート オーボエ 高木亜美さんと『千鳥の曲』
Performed "Chidori no Kyoku" with oboist TAKAGI Ami at the Japan Cultural Institute in Cologne concert

◎ 編集について

・文化交流使による活動報告は、筆者本人の表現を尊重しており、公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note

- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.

文化庁文化交流使一覽

文化庁文化交流使一覧 2020年2月現在

※派遣型は派遣順となっています。*印は、次年度も引き続き活動

「文化交流使」には6つのカテゴリがあります。

1. 長期派遣型 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行います。（平成27年度～）
2. 東アジア文化交流使 日中韓文化大臣会合での合意等に基づき、日本在住の中堅・若手の芸術家、文化人等が中国、韓国等の東アジア諸国に一定期間（1週間から2週間程度）滞在し、それぞれの専門分野での講演、講習や実演、デモンストレーション等を行います。（平成26年度～）
3. 海外派遣型 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成26年度実施）
4. 短期指名型 国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行い、日本文化の普及活動を行いました。（平成20年度～平成25年度実施）
5. 現地滞在者型 海外在住の芸術家、文化人等がその滞在国内で、それぞれの専門分野で講演、講習や実演デモンストレーション等を行いました。（平成15年度～平成21年度実施）
6. 来日芸術家型 公演等で来日する諸外国の著名な芸術家、文化人が、日本滞在期間を利用して学校等を訪問し、実演、講演等を行いました。（平成15年度～平成19年度実施）

平成15年度（2003年）

〈海外派遣型 — 12名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン、スロバキア、アイスランド、ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内 美江子	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春*	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
バロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温*	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑*	落語家	タイ、イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日、平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰*	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎*	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田 犬彦*	映画評論家	イスラエル、セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

〈現地滞在者型 — 4名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子*	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直み*	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ*	詩人、スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子*	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

〈来日芸術家型 — 5組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カブソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年）

〈海外派遣型 — 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭斎	重要無形文化財「螺細」（各個認定）保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日

橋口 謙二*	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日
井上 廣子*	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日
宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日

〈来日芸術家型 ―― 5組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシュ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムパイヤ・プラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワ・ルルー	オーボエ奏者	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット奏者	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

平成17年度 (2005年)

〈海外派遣型 ―― 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日
村井 健	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日
神田 山陽*	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日
平田 オリザ	劇作家, 演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日
Ikuo 三橋*	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル, フィンランド, ブラジル	平成18年1月15日～12月14日

〈現地滞在型 ―― 2名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日
本名 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日

〈来日芸術家型 ―― 6組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレグッド	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランベッター TEN OF THE BEST	トランペット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

平成18年度 (2006年)

〈海外派遣型 ―― 9名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日

川井 春香 ^{しほこう}	華道家	スウェーデン、スペイン、イタリア、フランス	平成18年9月12日～12月15日
勝美 巴湖* ^{ともこ}	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日
坂手 洋二*	劇作家、演出家	アメリカ、フランス、ドイツ	平成19年2月5日～4月13日
桂 小春團治 ^{こはるだんじ}	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日
豊澤 富助 ^{とよざわ}	人形浄瑠璃文楽	イギリス、ドイツ、スイス、イタリア	平成19年2月26日～3月28日
寺井 栄* ^{てらい}	能楽師（能楽観世流シテ方）	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日
小林 千寿* ^{ちず}	囲碁棋士	オーストリア、スイス、ドイツ、イギリス、フランス、ブルガリア、チェコ	平成19年3月14日～平成20年3月13日

〈現地滞在者型 ― 1名〉

氏名/団体名	プロフィール	活動国	活動期間
大坪 光泉* ^{こうせん}	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日

〈来日芸術家型 ― 9組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園（横浜）
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日、11日	新潟県立新潟盲学校、新潟県立上越養護学校
ペーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上戸老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家、オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・バット・チョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日、20日	相模原市立若松小学校、板橋区立志村第四小学校
フランツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽団	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

平成19年度（2007年）

〈海外派遣型 ― 9名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
立松 和平 ^{わへい}	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日
三浦 友馨 ^{ともけい}	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日
名嘉 睦稔 ^{なか ぼくねん}	画家	韓国、フランス、スペイン	平成19年8月30日～11月13日
本間 博*	将棋棋士	フランス、イギリス、ドイツ、スペイン、モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日
中村 享 ^{かつた}	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル、チリ、アルゼンチン、メキシコ、コロンビア、エクアドル、ベネズエラ、コスタリカ、ペルー、ウルグアイ、マダガスカル、南アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日
湯山 東 ^{あづま}	画家	フランス、チェコ、ドイツ	平成19年11月2日～12月19日
桂 かい枝* ^し	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日
橘 右門* ^{きくみん}	寄席文字書家	イギリス、ドイツ、ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日

〈来日芸術家型 ― 7組〉

氏名/団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリャコフ	トランペット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校

イアン・パウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱団	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シビリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルーツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度 (2008年)

〈海外派遣型 — 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ, 韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千宗屋*	茶道家	アメリカ, フランス, イタリア, ドイツ, メキシコ, ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若 猶彦	能楽師 (シテ方), 静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 千寿	囲碁棋士	フランス, オーストリア, ドイツ, イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 衛	重要無形文化財「彫金」(各認定) 保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津 文字兵衛	常磐津三味線奏者, 作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田 栄香 (千栄子改め)	地歌箏曲演奏家	フィリピン, インドネシア, マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 賢司*	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在型 — 2名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
上野 宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
ブーイ 文子*	茶道家	タイ, インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 — 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団 狂言		インドネシア	平成20年9月3日, 5日	山本東次郎家, 狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊 (邦舞)	ブラジル	平成20年9月16日, 25日	
太神楽曲芸協会	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
鬼太鼓座	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」 ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度 (2009年)

〈海外派遣型 — 10名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
有野 芳人	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ, オーストリア, ドイツ, スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬 慎仁	三線奏者	フィリピン, 中国, フランス, ドイツ, イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀 若狭掾	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」(各認定) 保持者	イギリス, アイルランド, オランダ, ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本 千歳大夫	人形浄瑠璃文楽	チェコ, ドイツ, オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷 宗苺	香道家元後継者	フランス, 中国, イタリア, ドイツ, アメリカ, ルクセンブルク, フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武関 翠堂	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日

伊部 京子	和紙造形家	アメリカ, エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保 修	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋 貴風	尺八演奏家	韓国, ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 ―― 1名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
澤崎 琢磨	和太鼓奏者	パラグアイ, ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 ―― 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞, 津軽三味線, 和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日, 8日	
猿楽會	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日, 24日, 26日	和太鼓「裊弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年）

〈海外派遣型 ―― 12名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
黛 まどか	俳人	フランス, イギリス, ルーマニア, ベルギー, ハンガリー, ドイツ	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール, マレーシア, 韓国, イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
藤間 万恵*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
佐々木 康人	華道家	ベトナム, シンガポール, タイ, マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
蓑輪 敏泰	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
笑福亭 銀瓶	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
安田 泰敏	囲碁棋士	オーストリア, スイス, フランス, ロシア, ヨルダン, イスラエル, モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル, イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
山内 健司	俳優	フランス, ベルギー, ルクセンブルク	平成23年1月7日～3月31日
澤田 勝成	津軽三味線奏者	中国	平成23年2月20日～3月20日
津村 禮次郎*	能楽師	ロシア, ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型 ―― 4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日, 29日, 11月1日, 2日
金春流能ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日, 28日

平成23年度（2011年）

〈海外派遣型 ― 6名・1グループ〉

氏名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
真鍋 尚之*	雅楽演奏家、作曲家	ドイツ、フランス、オーストリア、スウェーデン、ロシア、ベルギー、オランダ、イタリア、スイス、ベラルーシ、チェコ、セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
時友 尚子	染色家	エストニア、ラトビア、リトアニア、フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
薄田 東仙	書道家、刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN (井上良平、井上公平、齋藤秀之)	和楽器奏者	タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
佐佐木 幸綱*	歌人	ドイツ、ポーランド、スイス、フランス、オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
話傳の会	人形浄瑠璃文楽（素浄瑠璃）	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能、大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度（2012年）

〈海外派遣型 ― 8名・1グループ〉

氏名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
榎戸 二幸	生田流箏曲	ドイツ、オーストリア、イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるま てるび（うるま、てるび）*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
茂山 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ、オーストリア、ルーマニア、リトアニア、ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
海老原 露巖	墨アーティスト、書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
藤本 吉利	和太鼓奏者	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊家	スペイン、ポルトガル、ベルギー、イギリス	平成25年1月21日～3月11日
山路 みほ*	箏曲演奏家	ロシア、ドイツ、イタリア、スイス、スロベニア、オーストリア、スロバキア、フィンランド、ラトビア、ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ、ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
黒森神楽アメリカ公演実行委員会	伝統芸能、大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団	演劇	アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度（2013年）

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長、アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日

平尾 成志 ^{まさし}	盆栽師	リトアニア、イタリア、フランス、オランダ、アメリカ、メキシコ、オーストラリア、ドイツ、トルコ	平成25年6月11日～10月24日
武田 双雲 ^{そううん}	書道家	ベトナム、インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
レナード 衛藤 ^{えとう} *	和太鼓奏者	スイス、フランス、イタリア、チュニジア、ポルトガル、インド、オランダ、ドイツ、ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー、振付家	インドネシア、ベトナム、シンガポール	平成25年10月18日～12月3日、平成26年1月4日～19日
挟土 秀平 ^{はさど}	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
森山 未来 ^{みらい} *	俳優、ダンサー	イスラエル、ベルギー、イギリス、スウェーデン、ドイツ、ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター（学芸員）、大学教授	アラブ首長国連邦、ドイツ、モロッコ、フランス、アメリカ、モナコ、アルメニア、グルジア、スウェーデン、ベルギー、イギリス、イタリア、中国、チェコ、ハンガリー、スイス、ロシア、ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ― 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
藝〇座 ^{げいまるざ}	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日、28日
チェルフィッチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年10月31日、11月2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア、ドイツ	平成25年11年12日、14日、18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月19日、26日
山海塾	舞踊（舞踏）	インド	平成26年1月15日、16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年）

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
中澤 弥子 ^{ひろこ}	食文化研究者、長野県短期大学教授	フランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、イタリア、スロバキア、イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ、トリニダード・トバゴ、キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、バーレーン、ベトナム、タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十蒔絵」代表	イギリス、フランス、中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部、かたりすと	ドイツ、トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル、ブラジル、アメリカ、イギリス、イタリア、スイス、アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家、小説家	中国、韓国、タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄 ^{こうぼる}	金春流能楽師	フランス、アメリカ、カナダ	平成27年2月1日～3月15日

〈東アジア文化交流使 ― 4名・1グループ〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
多田 淳之介	演出家	韓国	平成26年12月22日～29日
WASABI	新・純邦楽ユニット	中国	平成27年1月3日～9日
池田 卓	音楽家	韓国	平成27年1月25日～2月1日
山田 うん	振付家、ダンサー	中国	平成27年3月9日～16日
柴 幸男	劇作家、演出家	中国	平成27年3月16日～29日

平成27年度（2015年）
〈長期派遣型 ― 7名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
青木 涼子	能×現代音楽アーティスト	アイルランド, フランス, ドイツ, デンマーク, イギリス, ハンガリー, イタリア	平成27年6月20日～8月9日, 9月17日～11月1日
柳原 尚之	近茶流嗣家, 「柳原料理教室」副主宰	ニュージーランド, ブラジル, カナダ, アメリカ	平成27年7月29日～9月20日, 9月28日～11月8日
矢内原 美邦	振付家, 劇作家, 近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授	シンガポール, マレーシア, 韓国, タイ, ミャンマー, ベトナム, アメリカ, インドネシア, フィリピン	平成27年8月22日～平成28年1月31日
畠山 直哉	写真家	メキシコ, インド, フランス	平成27年9月2日～平成28年2月10日
小野寺 修二	コンテンポラリーダンス, マイム, 「カンパニーデラシネラ」主宰	ベトナム, タイ	平成27年12月15日～平成28年1月27日
藤田 六郎兵衛	能楽笛方 藤田流十一世宗家	イギリス, フランス, 韓国	平成28年2月23日～3月30日
吉田 健一*	「吉田兄弟」, 津軽三味線奏者	オランダ, スペイン, イタリア, ポルトガル	平成28年3月27日～5月25日*

〈東アジア文化交流使 ― 3名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
スズキ 拓朗	演出家, 振付家, ダンサー	韓国	平成28年2月15日～24日
楠木 早紀	競技かるた永世クイーン	中国	平成28年2月28日～3月7日
やなぎ みわ	美術作家, 舞台演出家	中国	平成28年3月2日～8日

平成28年度（2016年）
〈長期派遣型 ― 6名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
佐野 文彦*	建築家, 美術家	イタリア, デンマーク, ベルギー, フランス, オランダ, アイスランド, ドイツ, 韓国, マレーシア, フィリピン, 中国, インド, エチオピア, メキシコ, アメリカ, インドネシア	平成28年8月20日～平成29年5月10日
土佐 尚子*	アーティスト, 京都大学教授	イギリス, 韓国, フランス, アメリカ, シンガポール, タイ, フィリピン, ニュージーランド	平成28年10月27日～平成29年4月30日
柳家 さん喬	落語家	アメリカ, カナダ	平成29年2月5日～3月6日
佐藤 可士和*	クリエイティブディレクター	アメリカ, イギリス, フランス	平成29年3月18日～4月17日
藤間 蘭黄*	日本舞踊家	アメリカ, チェコ, ウクライナ, ポーランド, ハンガリー, スロベニア, フランス, ロシア, ドイツ, イタリア	平成29年3月29日～7月25日
山田 うん*	振付家, ダンサー	イスラエル, ジョージア, エストニア, アルジェリア, イギリス, ベルギー, スペイン, スリランカ, マレーシア, オーストラリア, アメリカ	平成29年3月29日～9月30日

〈東アジア文化交流使 ― 6名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
笹本 晃	アーティスト	中国	平成28年11月3日～14日
村川 拓也	演出家	中国	平成28年11月8日～21日
宝生 和英	宝生流能楽師 第20代宗家	中国	平成28年12月5日～15日
久門 剛史	美術作家	中国	平成28年12月19日～24日
蓮沼 執太	音楽家	中国	平成29年1月9日～18日
長田 育恵	劇作家/演劇ユニット てがみ座 主宰	韓国	平成29年3月21日～28日

平成29年度（2017年）

〈長期派遣型 ― 5名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
増田 セバスチャン*	アートディレクター、アーティスト	オランダ、南アフリカ、アンゴラ、アメリカ、ボリビア、ブラジル	平成29年9月21日～10月17日、11月1日～12月19日、平成30年1月2日～2月24日、3月3日～4月1日
大友 良英	音楽家	アルゼンチン、チリ、ブラジル、メキシコ、アメリカ、イタリア、フランス	平成29年10月31日～12月13日、平成30年2月1日～2月15日
種田 道一	金剛流能楽師	アメリカ、フランス、スペイン、イタリア、ハンガリー	平成30年1月20日～3月15日
鈴木 康広	メディアアーティスト、武蔵野美術大学准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員	アメリカ、カンボジア、ドイツ、アイスランド	平成30年2月12日～3月16日
本條 秀慈郎*	三味線演奏家	トルコ、アメリカ、イタリア、フランス、イギリス、ドイツ、チェコ、ロシア	平成30年3月12日～6月29日、9月2日～10月17日

〈東アジア文化交流使 ― 3名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
万城目 学	小説家	韓国	平成29年12月14日～20日
藤原 ちから	批評家、BricolaQ 主宰	中国	平成30年1月11日～26日
モリ川 ヒロトー	映像クリエイター・音楽家・写真家・エッセイスト	韓国	平成30年3月4日～14日

平成30年度（2018年）

〈長期派遣型 ― 4名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
玉川 奈々福	浪曲師・曲師	イタリア、スロベニア、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、キルギス、ウズベキスタン	平成30年5月27日～7月10日
田中 功起	アーティスト	アメリカ、スイス、ドイツ、ギリシャ、中国、オランダ	平成30年7月1日～平成31年1月4日、平成31年1月20日～25日、1月30日～2月4日
笠松 泰洋	作曲家	エクアドル、アルゼンチン、チリ、ペルー、イギリス、オーストリア	平成30年11月13日～12月14日、平成30年12月31日～平成31年2月6日、3月2日～3月24日
米川 敏子	生田流箏曲・地歌 演奏家	カザフスタン、イギリス、ドイツ	平成31年2月21日～3月22日

〈東アジア文化交流使 ― 2名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
毛利 悠子	美術家	中国	平成30年12月3日～17日
水江 未来	アニメーション作家	韓国	平成31年1月11日～20日

令和元年度（2019年）

〈長期派遣型 ― 6名〉

氏名	プロフィール	活動国	活動期間
黒田 鈴尊	尺八奏者	中国、イタリア、ブラジル、フランス、ドイツ、ポルトガル	令和元年5月30日～7月28日
清水 利伸	両口屋菜匠 取締役顧問	スペイン、フランス、ドイツ	令和元年6月15日～7月15日
森 隆宏	盆栽師	カナダ、アメリカ、オーストラリア、シンガポール	令和元年7月17日～9月14日
田村 圭吾	京料理 萬重若主人、全国芽生会連合会 監事	ニュージーランド、エルサルバドル、ハンガリー、マケドニア、レバノン、アラブ首長国連邦	令和元年8月26日～10月4日

三谷 純	筑波大学 教授	中国、フィリピン、マレーシア、バングラデシュ、 インド、タイ、ミャンマー、ベトナム	令和元年10月27日～12月22日
中村 京蔵	歌舞伎俳優	アメリカ、キューバ、メキシコ	令和元年11月5日～12月4日

第 17 回 文化庁文化交流使フォーラム－文化庁文化交流使活動報告会－
主催：文化庁

The 17th Japan Cultural Envoy Forum

Host: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

